編集後記

スリランカのNGOサルボダヤ運動のA.T.アリヤラトネ博士が、2024年4月16日に92歳で亡くなった。葬儀もサルボダヤの本部のあるモロトワと首都コロンボで盛大に行われたようである。サルボダヤ運動は、1958年当時コロンボで高校教師だったA.T.アリヤラトネ氏によって設立された。サルボダヤ運動は、スリランカ全土で1万5000以上の農村において農民の自立を目指し、ワークキャンプ、農村開発、女性参加、マイクロファイナンス、津波復興支援、適正技術、保育園、エコツーリズム、平和構築等の活動、仏教面ではラトゥナプラの仏教研修のセンター、仏教僧の指導による麻薬中毒リハビリプロジェクトへの資金的支援等を行ってきた。

著者は、1987年に庭野平和財団の視察団の一員として、サルボダヤ運動を数週間訪問した。その時A.T.アリヤラトネ氏は、著者を含めて視察団の訪問先まで付き添い、暖かく迎えてくれたことを思い出す。著者がサルボダヤ運動に出会って40年近くの月日が流れたが、その開発の理念や倫理を再検討する上で、長い活動経験があるサルボダヤの人間開発を改めて見直すことが必要であると考え、2011年から2014年までサルボダヤ運動を4年間訪問し、今日のサルボダヤ運動の活動を人間開発の面から調査した。

サルボダヤ運動の思想的基盤は、仏教哲学に基づく全ての人間の「覚醒」と「労働の分かち合い」による農村開発を進め、人間の持つ潜在能力を向上させるために「貧困のない社会」、「過度の豊かさ、浪費のない持続可能な社会」、「ガンジーの非暴力の平和な社会」という人間開発のモデルを提示している。この人間開発モデルは、経済開発だけでなく、文化的、道徳的、精神的開発が重要であり、伝統文化、宗教的価値観を見直し、心の開発というアプローチを実施している。このサルボダヤの人間開発アプローチは、改めてご紹介することにしたい。ここにA.T.アリヤラトネ博士への哀悼の意を表すると共に、ご冥福をお祈り申し上げたい。

さて、本号では、研究者から論文二つ、実践者から論潮一つ、研究者から調査研究一つ、追悼文一つをご寄稿いただいた。本号の特集は、「パレスチナ・イスラエル問題を考える」である。特集についてのコメントは、1頁で山中編集員がコメントを述べているので、そちらをご参照していただきたいが、イスラエルのパレスチナ報復攻撃が止まず、毎日送られてくるパレスチナの悲惨な状況に心を痛めている。先ほどのサルボダヤ運動のA.T.アリヤラトネ氏の唱える「非暴力の平和社会」の実現を願うばかりである。

次に、円城調査研究は、東アフリカのケニアのマサイ・マラ北部・セケナニ地域のマサイ部族の伝統と変容に関する報告である。マサイの概要、動物を含めた自然環境の共存と近代化によるマサイの変化を写真でわかりやすく説明している。マサイにおける自然と人間からの影響の有無の両要素による変化について考察された、このような会員からの調査報告の投稿は今後期待したい。

また、亡くなられた土生長穂先生への追悼文を河合理事から寄せていただいた。

最後に、今回の本誌の編集作業は、山中達也理事(編集担当)により行ったことを付記する。

(2024年7月　編集長　重田康博)